

最優秀賞

忘れ難き記憶

長野県 才教学園中学校二年 塩原 遼大

この夏、僕は松本市の代表として派遣されて、広島市の平和記念式典に参列しました。原爆ドームや資料館を見学し、被爆者の方の講話を聴いて、翌朝の平和記念式典に臨んだ経験は、忘れ難いものになりました。

特に、被爆者の川本省三さんのお話は、強烈でした。被爆後、人々は食べるものがなく、道端に落ちていた新聞紙を食べたりしたこと、食べ物欲しさに卑劣な手段で人の物を奪わざるを得ない状況があったこと。戦争が人の心を変えてしまったのです。僕が想像できないような体験をされたのにも関わらず、「原爆を落としたアメリカを、今更憎んでも仕方がない。」

川本さんは、そう語りました。あれだけ酷い目にあわされた方が、その思いに至るまでにはどれほどの苦悩の日々があったことでしょう。それらを乗り越

え、これからのことを考えて生きていくのだ、という前向きな姿勢に、私は驚かされました。

平和記念公園を訪れた際、中央にある原爆慰霊碑の中の石棺の碑文にすいよせられました（原爆慰霊碑の中の石棺には、原爆犠牲者の名前を記した過去帳が納められています）。石棺の正面に刻まれた「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」という碑文。原爆弾を落としたのは日本ではなくアメリカです。それならば、「過ちは繰返させませぬから」という文がふさわしいのではないかと、事前学習した時に思っていた碑文でした。しかし、原爆資料館を見学し、被爆者の方のお話を聞いた事で、僕の考えは変わっていききました。「させない」という人に依存するような姿勢では核廃絶は到底、実現することはできない。だから、自分たちから過ちを繰り返させないのだという強い決意の表明だと

確信したのです。

原子爆弾については様々なメディアで報道され、僕なりに理解していたつもりでした。しかし、今年新しくなった資料館で僕が実際に目にした、山積みになった骸骨や全身焼けただれた人々の痛々しい写真、焼け焦げて溶けた三輪車などは、想像を絶するものでした。

『百聞は一見にしかず』とは良く言ったものです。見なければわからないものがある。原子爆弾に対するイメージが、僕の中でガラリと変わりました。これほど恐ろしいものだったとは…。

被爆者の平均年齢が八十二歳を越えた今、この悲惨な体験を伝え、核廃絶を訴えていくことができるのは、僕たちしかない、そう思いました。

広島市の街は高層ビルが立ち並び、川が穏やかに流れ、人々が行き交い、平和を感じさせます。七十四年前にこの街がすべて消滅したとは到底思えません。しかし、僕がここで見たことは一生忘れることが出来ません。この悲惨な戦争の記憶を風化させてはならない。胸に刻み込まれた貴重な体験の数々を、これからの生活に活かしていきたいと思

